

好調な経済実績から「オランダモデル」と呼ばれるオランダでは、伝統的にも現代においても、所謂「中間団体」が重要性を発揮している。報告では、労使を核とした中間団体が織り成す「コンセンサスデモクラシー」の像を、エリート協調（多極共存）、ガヴァナンスと中間団体の関係（歴史的な政治社会組織形成・マクロ/メゾコーポラティズム）、福祉国家（類型・保険制度など）の3つのレベルについて分析したうえで、近年、各レベルにおいて新右翼の躍進、ガヴァナンスの変容（審議会改革）、福祉改革（社会保険制度）といった展開が生じており、コンセンサスデモクラシーの質的な変化が生じているのではないかと指摘した。

その後の討論では、法律分野を含むさまざまな参加者から、コンセンサスデモクラシーの意思決定システムの変化（議会政治・政党・官僚との関係、アクターの変化、法案形成過程の変化）、中間団体の性質による差異（労使団体と環境・消費者など新団体）、新政党と排外的ナショナリズムとの関係などについて質問が提起されて、密度の濃い議論が行われた。